

平成30年度 宮崎県立宮崎海洋高等学校 学校評議員会(学校関係者評価委員会) 資料

※【評価段階】 A：十分達成 B：概ね達成 C：検討の余地あり D：不十分

評価項目(目標)	手段・ゴールイメージ	具体的取組と達成状況(成果○と課題▲)	自己評価	自己評価コメント	関係者評価
1 生徒にとって安心・安全な学習環境の確立 (予防的視点による足並みの揃った生徒指導)	<p>① いじめ・暴力・反社会的行為は絶対に許さない方針を適宜発信し、命と人権を守る重要性を認識させる。</p> <p>② 自己指導能力(自ら正しく判断して行動できる力)の育成を念頭に、粘り強い生徒指導により規範意識と社会性を育む。</p> <p>③ 定期的な面談やアンケートによる生徒の状況把握と情報共有を通して、適時的確な予防的指導に努める。</p> <p>④ 各種行事や諸活動等に積極的に取り組み、活躍の場を与えることで、豊かな人間性と自尊感情を育む。</p>	<p>○予防的生徒指導として、定期的な生徒アンケートと面談を実施し現状把握に努めるとともに、学期毎に外部講師による意識啓発のための講話を行った。特に薬物依存更正施設「宮崎ダルク」の講話は生徒が真剣に受けとめていた。</p> <p>○洋上航海中の事件再発防止に向けた取組、①担任による面談週間、②寮生へのアンケート、③長期乗船前・乗船中のアンケートと面談、④学年会の定例化等も確実に定着し、情報収集と共有の場が広がり、いじめや諸トラブルの早期発見と組織としての対応力が確実に向上している。また、昨年度新たに制定した「乗船可否判断の校内ルール」の適用について、県教委とも緊密な連携を図りながら協議を行うことができた。</p> <p>○落ち着いた学習環境醸成のために本鈴2分前の予鈴を導入した。生徒の動きと意識が僅かだが変化してきている。</p> <p>○学期や行事の節目に、生徒会長が自分の思いを全校生徒に語る時間を設けた。特に体育祭では、生徒の態度や校歌の歌声に大きな変化が見られた。今後も継続し、教師とは違うアプローチで生徒の意識高揚に繋げていきたい。</p> <p>▲事ある毎に「いじめ、暴力、反社会的行為」は絶対に許さない旨の発信を心がけたが、これまで届いていなかった、地区生徒寮での上級生による下級生への行き過ぎた指導行為、校内での問題行動が断続的に発生した。寮規定及び校内の規定を整理し、次年度は新規のハンドブックを保護者・生徒に配布することで、指導根拠を確実に明示して未然防止に努めたい。</p> <p>▲全職員による登校時指導、昼休みの巡回指導など、規律やいじめ、規範意識の育成に向けた粘り強い取組が継続できているが、問題行動の未然防止までには繋がっていない。1年次での本校への適応指導が重要であり、生活態度、授業規律、学ぶ意欲の醸成、部活動への加入等について具体的な方策を検討中である。</p> <p>▲思慮に欠けた幼稚な言動に起因する諸トラブルが多く、未然予防の視点で、具体的な方策の研究と実践が必要。</p> <p>▲登壇障害の診断を受けている生徒に対する、合理的配慮やインクルーシブ教育の推進が難しい。</p>	C	<p>生徒が安心して学べるよう、安心・安全な学習環境の確立が求められているが、残念ながら、思慮に欠けた幼稚な言動による諸トラブルや問題行動、粗暴的な行為が断続的にくり返されている。校内規定の改訂と厳格な適用を議論中である。一方で、入学後の学校生活への失望や不満の声も聞こえてくる。1年次に専門科目がない、授業レベルがこれまでの焼き直しに感じる、課題がほとんど課されない、上位資格取得への意識付けが不十分等々、学力層の幅が広く焦点を絞りきれない面もあるが、学びに向かう心に灯をつける手立てについても改善を図りたい。</p>	B
2 宮崎県産業教育審議会答申の具現化 (教育内容・システムの再検討とリニューアル)	<p>① 基礎学力の定着と社会の変化に対応した「教育内容」や「指導方法」に関する検討及び実践を並行して進める。</p> <p>② 大学や外部機関・企業等との連携を推進し、水産業の6次産業化等の課題に対応できる人材育成を図る。</p> <p>③ 九州地区内の他校や関係機関との交流研修等を推進し、専門職員の技術・技能及び指導力の向上を図る。</p> <p>④ 実習船教育の充実と代船建造に向けた構想の策定を行う。</p>	<p>○小中学校での学習内容が未定着のまま入学した生徒の基礎学力向上のために、1年次に「学び直しの時間」を導入した。ある程度の成果がみられたため、次年度は45分短縮授業で時間を生み出し拡充を検討中である。</p> <p>○ベイコムハート、宮崎経済同友会、宮崎中央RC、水産関連企業等の外部団体の協力を仰ぎ、キャリア教育の推進に努め、面接指導やインターンシップを依頼するなど、企業経営者の視点で社会に求められる人材について理解させ、変容を自覚させる場を設けることで、勤労観や就業意識の向上を図った。</p> <p>○「社会に開かれた教育課程」の具現化を図るため、食品系では課題研究を軸に、地元企業とのコラボ製品として災害時の備蓄缶詰の商品開発・販売を進めており、本年度は新たに県産のカツオを原材料として「カツオのドライカレー」の開発・販売を行った。九州地区水産系高等学校生徒研究発表大会では最優秀賞(1位)を、同全国大会では奨励賞を受賞した。また2月には「備蓄缶プロジェクト」の取組が高く評価され、九州農政局長賞を受賞した。</p> <p>○来年度の新1年生から先行実施が義務づけられている新学習指導要領の「総合的な探究の時間」については、従来の「課題研究」で代替も可能だが、特許庁が推進している「知財学習」を新たに導入し、これからの時代に求められる資質や能力を醸成するために、新たな視点で3力年の指導計画を作成中である。</p> <p>○6次産業化を見据えて食品系生徒も乗船実習を実施しており、今後は航海行程に企業訪問を設定し、原材料の確保、製造・販売、流通ルートの構築など、収益の拡充に向けた現場の取組を知り、6次産業の発展の可能性を感じさせる体験を乗船実習に盛り込み、実習船を活かした一層の実習活動の充実を検討していきたい。</p> <p>○代船建造については財政当局の理解が得られ、知事・県議会議長の了解を得て、H32年度に調査設計、H33・34年度に建造という道筋がついた。今後は、操業実習の在り方を含めた乗船実習の意義・目的の再確認を行い、その目的に沿った船の形態や大きさについて具体的検討を行っていく。</p> <p>▲専門系職員の県内外関係機関との交流研修は実施できていない。引き続き検討を行っていく。</p>	B	<p>次期学習指導要領も告示され、予測困難な変動の激しい社会を生き抜くための資質・能力を育成することが求められている。水産高校から海洋高校に校名と学科の改編を行ってから20数年が経過しており、学科・系・教育課程のリニューアルが急がれる。キャリア教育、インターンシップ、課題研究など、先見性のある取組が数多く実践できており、これらを新たな視点で再整理しながら、次年度から導入する「知財学習」を軸にして、本校独自の教育システムを早急に構築したい。どのような教育を行うにしても、指導する教師の資質向上が不可欠であり、そのための研修も積極的に推進していきたい。</p>	B
3 水産・海洋教育の魅力の発信 (生徒募集の更なる工夫による入学定員の充足)	<p>① 関係機関や地元企業が主催するイベント等に積極的に参加し、本校と水産・海洋関連産業の魅力伝える。</p> <p>② 中山間地域の中学校訪問、中学校説明会や説明資料、体験入学の在り方を再検討し、更なる工夫改善を図る。</p> <p>③ 一般県民を対象とする多目的航海の一部を削減し、中学生と保護者に限定した募集枠の新設を検討する。</p> <p>④ HP等による情報発信方法の改善と出前授業の新設。</p>	<p>○本年度も、JA食フェスタ、みなど祭りなど多くのイベントへの参加要請を受諾するとともに、校外での販売実習も積極的に行うことで、関係職員・生徒が新聞記事やTVニュース等を通して、本校のよさや水産・海洋関連産業の魅力の発信に努めた。2月には「備蓄缶プロジェクト」の取組が高く評価され、九州農政局長賞を受賞した。</p> <p>○販売実習の積極的導入は進路開拓へつながり、水産食品系生徒の県内就職率は増加傾向にある。また、実習機会やイベント等への参加を増やしたことで社会との接点の場が拡充され、本校への関心度は着実に高まりつつある。</p> <p>○中学校説明会への乗組員の同伴を本年度もお願ひするとともに、学校案内パンフレットの内容や構成を抜本的に見直し、説明用プレゼンテーションも更なる改善を図った。7月の体験入学の参加者数は、大幅に増えた昨年度よりは減少したが、参加した生徒・保護者の満足度は高かった。11月には保護者向け説明会を本年度も実施した。</p> <p>▲高校入試の状況は、推薦入試では本年度13名志願で0.36倍(昨年度18名で0.5倍、一昨年度12名で0.33倍)、一般入試では本年度78名志願で0.72倍(昨年度98名で0.96倍、一昨年度58名で0.54倍)となった。上記の取組等により学校のPRに努めてはいるが志願者増には結びついていない。中学校への情報収集を行うとともに、引き続き水産海洋教育の魅力の発信を通して選択される学校を目指さねばならない。</p> <p>▲昨年度の中学校へのアンケートから、本校の魅力が十分に周知されておらず、情報発信がまだまだ不十分であることが分かっている。販売実習など社会との接点の場は増えてはいるが、小中学生および学校職員、保護者への広報については更なる工夫改善を要する。</p> <p>▲一般県民を対象とする多目的航海の一部を削減し、中学生と保護者に限定した募集枠の新設については具体的な検討ができなかった。次年度への課題である。</p>	C	<p>一昨年度の高校入試の志願状況が大変厳しい結果であったため、昨年度は最重要課題として改善に努め大幅に改善された。本年度もその延長上で学校案内パンフレットの改訂等に取り組んだが、左記の通り厳しい状況に戻ってしまった。中学校へのリサーチから、本校の魅力や学習内容、卒業後の進路状況について情報発信が不十分であると指摘されている。海洋高校＝漁師養成校という安易なイメージを払拭できるよう、水産・海洋教育の魅力の発信を行ってきたい。また、中学校へのヒアリングを再度実施し、志望者減の原因を探り確実に対応したい。</p>	B
4 教育実習船乗組員の確保と待遇改善 (欠員の補充に努め乗組員の士気・使命感を高める)	<p>① ハローワーク、宮崎運輸支局、九州水産系校長会等のネットワークを活用し、欠員の補充を確実に行う。</p> <p>② 中間・Fビミツツ等停泊中の船内で実施し、船内環境や人間関係の実態把握に努めることで乗組員に寄り添い、実習船職員としての士気・使命感を高める。</p> <p>③ 「民間船員での職」と「県職の職位」との、給与面を含めた待遇差の改善に関して県教委と協議を重ねる。</p>	<p>○小野船長を、県教委公募の優良教育実践表彰に推薦したところ、これまでの実習船教育への貢献が高く評価され表彰を受けた。11月の帰港時の折に、進洋丸全体の評価であるとして参列者全員の前で授賞式を行い、乗組員の士気高揚に貢献できた。</p> <p>○個別アンケートや多目的航海時の乗船等を通して、乗組員の心情に寄り添いじっくりと話をすることで船内環境や人間関係に関する実態把握を行うことができた。今後の対応に活かしていきたい。</p> <p>○欠員に関しては何とか解消することができた。今後の定着を望みたいが民間流失の不安定な状況ではある。</p> <p>○以前の事件を受けて配置された「指導教官(臨時)」は、本年度の長期航海でも確実に機能している。正職員での配置を継続して要望していきたい。</p> <p>▲「民間船員での職」と「県職の職位」との給与面を含めた待遇差の改善、及び採用試験の実施時期・回数・必要資格等に関して、他県の状況をもとに県教委と協議を重ねたが、具体的な成果は得られなかった。引き続き協議を行ってきたい。</p>	B	<p>実習船教育を支えている進洋丸乗組員の処遇改善については、県教委の理解は深まっている。本年度は先進県である島根県を訪問し具体的な改善を検討してくれたが、知事部局とのすり合わせが難しいようでハードルを越えられない。引き続き協議を行い、高い使命感をもつ乗組員の士気高揚が図れるよう努力を重ねたい。</p>	B